

冷徹上司は残業の秘書をクンニと
甘い声で毎晩イカして離さない

R18

2026・10・2

目次

本文

金曜の夜九時を過ぎると、営業部のフロアは空調まで弱くなる。

残っている明かりは白峰みおのデスクのランプと、奥の部長席だけだった。

みおは来週の役員会の資料を直していた。画面の数字がにじんで、あくびが出る。手で隠したけれど、間に合わなかった。

「白峰」

後ろから低い声がした。

氷室玲一が立っていた。片手に紙コップのコーヒーを持っている。それを黙ってみおのデスクに置いた。

「残りは」

「あと少しです。三十分くらいで」

「さっきも三十分と言った」

「……すみません」

営業部長の氷室は昼間はこういう話し方し
かしない。

会議でも人の顔を見ない。用件だけ言っ
て、次の資料をめくる。新卒で入って四年、
そのうち二年を秘書として隣で過ごしても、
みおはこの人が笑ったところを見たことがな
かった。

先月、給湯室で彼のマグカップを来客用と
間違えて洗ってしまった。翌日、何も言われ
なかった。

怒っていないのか、怒るほどの相手でもな
いのか。みおにはいまだに分からない。

「君は今週、ずっと終電だ」

「役員会が近いので」

「効率が落ちている。二枚目の表、合計がずれている」

みおは慌てて画面を戻した。本当にずれていた。足す列をひとつ間違えている。

恥ずかしくて、耳まで熱くなる。

「すぐ直します」

「直さなくていい」

氷室はネクタイの結び目に指をかけて、ぐっとゆるめた。

みおは思わず見てしまった。この人が人前で襟元を崩すのを、初めて見た。

椅子の背をつかまれた。

くるりと回されて、みおは氷室と向き合う形になった。氷室はそのまま、みおの足元に片膝をついた。

「ぶ、部長？」

「先にイカせる」

「え？」

「頭が回っていないときは、先に体を楽にしたほうが早い」

言っている意味がすぐには分からなかった。

氷室の両手がみおの膝に置かれて、ようやく分かった。

「嫌なら椅子を戻せ。俺は席に帰る」

俺、と言った。

昼間は「私」としか言わない人だ。

みおの手はひじ掛けを握ったままだった。

椅子を回せば終わる。分かっているのに指が動かない。

この二年、資料を渡すたびに指を見ていた。電話を取る横顔を見ていた。見ているだけで終わると思っていた。

「……戻さないのか」

「……戻しません」

氷室が顔を上げた。

目が合った。眼鏡の奥の目がふっと細くなる。

「えらいな、みお」

声が違った。

さっきまでの冷たい声はどこにもない。低くてやわらかい声が、耳の奥をなでた。

名前を呼ばれたのも初めてだった。

（うそ……誰、この声……）

膝を開かれる。タイトスカートが腰までずり上がった。

ストッキングの上から内ももに唇が当たる。熱い息がかかって、みおの腰がびくんと跳ねた。

「あっ……」

「声は我慢しなくていい。この階は、もう俺たちだけだ」

「で、でも、警備の人が」

「巡回は十時。まだ来ない」

氷室の指がストッキングのゴムにかかった。

ショーツごと、ゆっくり下ろされる。パンプスが床に転がった。そのまま片足ずつ抜かれる。

ひんやりした空気が、ぬれたまんこに触れた。

「もうぬれてる」

「こ、これは」

「ほら」

指が割れ目をなぞった。くちゅ、と小さな音がする。

自分の体から出た音だと分かって、みおは両手で顔をおおった。

「顔を隠さない。俺を見てろ♡」

「むり、です……っ」

「見せて。みおのまんこ、ちゃんと♡」

そんな言葉をこの人が言うなんて。

頭が追いつかないまま、両膝をひじ掛けの上に乗せられた。椅子の上で脚が大きく開く。全部、見られている。

氷室が眼鏡を外して、デスクに置いた。

それから、顔を寄せた。

ちゅ、と音がした。

クリトリスに唇が吸いついていた。

「ひぁっ♡」

声が出た。

舌先が、クリの上を小さく往復する。ちろちろ、ちろちろ、ちろちろ♡

熱くて、ぬるぬるしている。指とはまるで違った。

「あっ、あっ、ぶちょ、そこ、だめ……っ♡」

「ここ、気持ちいいんだろ♡」

「きもち、いい、けど……っ♡」

「正直でえらい♡」

褒められた。

仕事では褒めてくれたことのない人に、こんなことで褒められている。

それがたまらなく恥ずかしくて、なのにお腹の下がきゅうっと熱くなった。

舌が下へおりていく。

割れ目をなめ上げて、入り口をくすぐって、またクリに戻る。

ぴちゃぴちゃぴちゃぴちゃじゅるるっ♡

静かなフロアに水の音ばかりが響いた。

（だめ、音、やらしい……♡ 部長が、私の、なめてる……♡）

指が入ってきた。

ぬぷ、と根元まで沈んで、中でくいと曲がる。お腹の裏側を押されて、みおの足の指が丸まった。

「ひっ♡ な、なか、やっ……♡」

「狭いな。指、締めつけてくる♡」

「いわ、ないで、くださ……っ♡」

「みおのまんこ、すごく熱い♡」

くちゅくちゅくちゅくちゅ♡

指が中をかき回して、舌がクリを吸う。

両方いっぺんにされて、腰が勝手に浮いた。椅子がぎし、と鳴る。

「あ、あ、あっ、だめ、くる、きちゃう……っ♡」

あと少し、というところで舌が離れた。

指も止まった。

「え……？」

「まだだ♡」

「な、なんで……っ」

「さっきの表。合計がずれた理由を言ってみろ」

急に昼間の声だった。

みおは涙目で氷室を見下ろした。口の周りをぬらしたまま、彼は平気な顔をしている。

「い、今、そんなの……っ」

「言えたら続きをする」

「……た、足す列を、ひとつ、間違えて……」

「正解」

甘い声に戻った。

ごほうびのようにクリをきつく吸われる。

「ひゃあぁっ♡♡」

「ちゃんと分かってる。眠くて手がすべっただけだ。お前は仕事ができる♡」

「あ、あっ、いま、ほめな、いで……っ♡」

「褒める。褒められると、ここがきゅっとなる♡ かわいい♡」

じゅぷじゅぷじゅぷじゅぷ♡

指が増えた。中がいっぱいに広げられる。

舌はクリを離さない。吸って、転がして、
また吸う。

「ぶちょ、ぶちょお、も、だめ、ほんと
に……っ♡♡」

「いいよ。イけ、みお♡」

その声で落ちた。

「あゝっ♡♡ い、いく、いっちゃ……っ
♡♡♡」

背中が反った。

中がぎゅうぎゅうと指を締めつけて、膝が
震える。目の前がちかちかして、息ができな
かった。

氷室は最後まで舌を止めなかった。びくび
く跳ねるクリをやさしくなめ続けている。

「ん、んんっ♡ も、もう、いった、いきま
した、からあ……っ♡」

「知ってる。上出来だ♡」

やっと口が離れた。

みおは椅子の上でぐったりして、天井を見た。蛍光灯は全部消えている。暗い天井に、デスクのランプの明かりだけが丸く映っていた。

氷室は手の甲で自分の口をぬぐった。それから、ハンカチでぬれたまんこをていねいにふいて、眼鏡をかけ直した。

ひじ掛けから脚を下ろされる。膝に力が入らなかった。

氷室が立ち上がった。スラックスの前がはっきり盛り上がっている。みおはそこから目

をそらせなかった。

「あの、部長は……その……」

「俺はいい」

「でも」

「今夜はお前を楽にしたかっただけだ」

氷室は自分のジャケットをみおの膝に掛けた。むき出しの脚が隠れる。

そして、みおのキーボードに手を伸ばし、表の列をひとつ直した。合計がぴたりと合う。キーをひとつたたいて、保存した。

「残りは月曜でいい。帰れ」

冷たい声だった。

ネクタイもいつの間にか締め直している。
さっきまでみおのまんこをなめていた人と、

同じ人には見えなかった。

「……あの」

「何だ」

「ありがとうございました」

言ってから、何のお礼なのか自分でも分からなくなった。

氷室は少し黙って、それから部長席のほうへ歩き出した。

「月曜、十八時。会議室Bを押さえてある」

「……議事録ですか」

「残業だ」

背中を向けたまま、彼は言った。

耳の後ろが赤かった。

月曜の朝、みおはエレベーターの鏡で自分の顔を確かめた。

普通の顔をしている。たぶん。

土日のあいだ、あの声が耳から離れなかった。

えらいな、みお。

思い出すたびに布団の中で足をばたつかせて、夜は自分の指で触ってしまった。ちっとも足りなかった。

フロアに入ると、氷室はもう席にいた。

「おはようございます、部長」

「ああ。十時の来客、資料は」

「デスクの右に置いてあります」

「分かった」

顔も上げない。

資料をめくる指に、つい目がいく。みおはあわてて目をそらした。

いつもどおりだった。金曜の夜は夢だったのかもしれない、とみおは半分本気で思った。

給湯室でお茶をいれていると、営業事務の田村さんが入ってきた。ひとつ上の先輩で、よくお菓子を分けてくれる。

「白峰さん、金曜も遅かったでしょ。警備さんが言ってた」

「役員会の資料が終わらなくて」

「部長と二人で？ 怖くない？」

「怖いですよ。合計がずれてるって怒られました」

「うわあ」

田村さんは笑って、自分のカップにお湯を注いだ。

「そうだ。経営企画の公募、また出るらしいよ。白峰さん、春に受けたやつ」

「……そうなんですか」

「今度は私も出そうかなって。事務のままだと、お給料上がらないし」

春、みおは書類で落ちた。

推薦の欄は空けたまま出した。あの人に頼む勇気がなかった。だから、落ちたことも言っていない。

「白峰さんは？　また出す？」

「まだ、決めてないです」

「そっか。部長が手放さないか」

冗談のはずなのに、みおは急須を持つ手を止めてしまった。

昼の会議で氷室はみおを見なかった。

資料を渡すとき、指先が触れた。それだけでみおは自分のボールペンを落とした。氷室は拾いもせずに次のページをめくった。

会議のあとで床を探したけれど、ペンは見つからなかった。

（やっぱり夢だったのかな）

十八時ちょうどに内線が鳴った。

「会議室B」

それだけで切れた。

会議室Bは廊下の突き当たりにある。

ガラスの天板の長いテーブルを、椅子が囲んでいる。廊下側はドアの横だけがすりガラスで、通る人の影がぼんやり映る。テーブルの奥のほうは、廊下からは見えない。

みおが入ると、氷室は内側から鍵をかけた。窓のブラインドも下ろしてある。

「座れ」

「はい」

「椅子じゃない。テーブルに」

みおはテーブルのいちばん奥の端に腰をのせた。ガラスが冷たくて、ももの裏がひやりとする。

氷室はその正面に椅子を引いて、座った。目の高さにみおの胸がくる。

「土日、何をしていた」

「え……洗濯とか、です」

「それだけか」

「……」

「言えないことをしたな♡」

甘い声に変わった。

みおの背中がぞくりとした。夢じゃなかった。

「自分で触っただろ♡」

「……っ、なんで」

「朝から、俺の手ばかり見ていただろ♡」

見抜かれていた。顔から火が出そうだった。

「どうだった。自分の指は♡」

「……足り、なかったです」

「正直でえらい♡」

ブラウスのボタンが上から外されていく。

ブラのホックも外されて、胸がこぼれた。
会議室の明かりは全部ついている。

「や、明るい……っ」

「明るいところで見たかった。きれいだ♡」

右の乳首に唇がかぶさった。

ちゅう、と吸われる。舌が先をくるくると
なでる。

「んっ♡ あ……っ♡」

左は指でつままれた。

こりこりこりこりこりこり♡

やさしいのに逃がしてくれない。乳首がど
んどん硬くなっていくのが、自分でも分かっ

た。

「胸、弱いんだな♡」

「しら、ない、です……っ♡　こんなの、さ
れたこと……っ♡」

「じゃあ俺が教える。覚えような♡」

ちゅぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅううっ♡

吸われるたびにお腹の下までびりびりと響く。

触られていないのに、まんこがじんじんしてきた。みおは膝をこすり合わせた。

「下も欲しくなった？♡」

「.....」

「口で言って。みお♡」

「……ほしい、です……なめて、ください……っ♡」

言えた。自分で言ってしまった。

氷室が小さく笑った。息が乳首にかかる。

「上出来だ♡」

スカートをめくられた。ストッキングとショーツをまとめて下ろされて、片足だけ抜かれる。

氷室は椅子に座ったまま、みおの腰を引き寄せる。テーブルの端ぎりぎりまでお尻が出た。両足は彼の肩にのせられる。みおは後ろに片手をついて、体を支えた。

ぬるり、と舌が入ってきた。

金曜は、なめられたただけだった場所だ。

「ひゃっ♡ な、なか、舌……っ♡」

熱い舌が浅いところを出たり入ったりする。

ぬぽぬぽぬぽぬぽじゅるるっ♡

鼻先がクリに当たって、そのたびに腰がびくつく。

「んあっ♡ あっ、あっ、ぶちょ、それ、へん、へんになる……っ♡」

「なっいいい。みおのまん汁、甘い♡」

「や、やだ、のまないで……っ♡」

「飲む。全部俺のだ♡」

じゅるじゅるじゅるじゅる♡

わざと音を立てられている。恥ずかしくて、気持ちよくて、みおは空いた手で氷室の髪をつかんだ。

そのとき、廊下で足音がした。

「——でさあ、来週の見積もり」

「あれ部長に出した？」

営業の男性たちの声だった。ドアの横のすりガラスに人影が並んで映る。

みおは息を止めた。

氷室は止まらなかった。

舌が抜けて、かわりに指が入ってくる。くちゅ、と音が鳴った。

（うそ、うそ、だめ、聞こえちゃう……っ）

みおは髪をつかんでいた手を離して、その手の甲をかんだ。

指が中でゆっくり曲がる。お腹の裏の、いちばん弱いところを押してくる。

親指がクリに乗った。くるくる、くるくる、と円をかく。

「……っ♡ ……んっ♡ ……っ♡♡」

「白峰さん見た？ 今日も残業かな」

「部長に捕まってんじゃない？ かわいそうに」

人影がドアのすぐ前で止まった。

みおのものが震える。氷室は下からじっとみおの顔を見上げていた。

口の形だけで言う。

イけ。

「……っ♡♡♡」

声は出さなかった。出せなかった。

喉の奥で悲鳴がつぶれて、涙がぼろっとこぼれた。体だけが、がくがくと跳ねて、中が指をしぼり上げる。テーブルのガラスがかたかた鳴った。

「今、何か音した？」

「空調だろ。行こうぜ」

足音が遠ざかっていった。

みおはやっと息を吐いた。指がぬるりと抜けていく。

「はぁっ、はぁっ……ひどいです……っ」

「よく我慢した。えらいな♡」

「えらく、ない……っ、ばれたら、どうするんですか……っ」

「ばれなかった。お前が声を殺せたからだ」

氷室は立ち上がって、みおの涙を親指でぬぐった。

それから、また椅子に座り直した。

「もう少し、いけるな♡」

「え、ま、まって、いま、いったばかり……ひぁあ♡♡」

クりに吸いつかれた。

敏感になったところを、ちゅうちゅと吸われる。指がまた入ってきて、さっきより速く動いた。

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡♡

「あゝ♡ だめ、だめだめ、つよ、い……っ♡♡」

「あいつらはもういない。今度は声、聞かせて♡」

「ぶちょ、ぶちょおっ♡ また、またくる、
きちゃ……っ♡♡」

「いいよ。みお♡」

「いっ……くううっ♡♡♡」

さっきより深かった。

腰が浮いて、ぷしゃっ、と何かが吹き出した。氷室のあごからワイシャツの胸まで、びっしょりぬれる。

みおは何が起きたのか分からなくて、ぼうっとそれを見ていた。

「……あ……ご、ごめんなさ……シャツ……」

「いい。替えはロッカーにある」

氷室は平気な顔で、ぬれたシャツを見下ろした。それから、ほんの少し口の端を上げた。

「潮まで吹くとは思わなかった♡」

「い、言わないでください……っ」

氷室はハンカチでみおのものをふいて、ブラのホックを留め直した。

ブラウスのボタンを、彼の手が下から留めていく。

みおはテーブルに座ったまま、彼のスラックスの前を見た。金曜と同じだ。硬く張っている。

「部長」

「何だ」

「私ばかり、です。金曜も、今日も」

「不満か」

「……不公平、です」

氷室の手がいちばん上のボタンで止まった。

「俺の番は、お前が自分から来たときだ」

「自分から……？」

「明日。終電を逃せ。地下二階の駐車場にいる」

冷たい声に戻っていた。

でも、ボタンを留める指はさっきよりも遅かった。

「来なければ、それで終わりだ。そのときは、ただの上司に戻る。評価にも響かせない」

「……」

「返事はいらない」

氷室は鍵を開けて、先に出ていった。

テーブルの上に黒いボールペンが残っている。昼にみおが落として、探しても見つからなかったペンだった。

みおはショーツとストッキングをはき直して、ペンを握った。それからスマホを出した。

乗り換え案内を開く。終電は零時八分。

いつもかけているアラームを、みおは指で消した。

火曜の深夜、零時八分。

みおは自分のデスクで、スマホの時計が九分になるのを見ていた。

終電が出た。

アラームは鳴らなかった。昨日、自分で消したからだ。

昼間の氷室はいつもと何も変わらなかった。

夕方に議事録を出したときも、目を通して「ここ、主語が抜けている」と言っただけだ。来るのかとも、待っているとも言わない。

来なければ終わり。あの言葉は本気なのだと思った。

みおはパソコンを閉じて、かばんを持った。

エレベーターで地下二階のボタンを押す。指が少し震えた。

駐車場はコンクリートと排気の匂いがした。

車はほとんど残っていない。いちばん奥の柱の横に黒いセダンが停まっている。

近づくと、助手席のロックが外れる音がした。

みおはドアを開けて、乗りこんだ。

「……来ました」

「ああ」

氷室は運転席でハンドルに片手を置いたまま、前を見ていた。

ジャケットは脱いで後ろの席に掛けてある。

「終電は」

「逃しました。自分で」

「そうか」

短い返事のあとで、氷室は長く息を吐いた。

肩が少し下がったように見えた。

(……もしかして、緊張してた？ この人が？)

「みお」

あの声だった。

氷室の体がこちらを向いた。大きな手がみおの頬を包む。

唇が重なった。

あんなことまでされたのに、キスは初めてだった。

やわらかく吸われて、舌が入ってくる。コーヒーの苦い味がした。

「ん……っ♡ ふ、あ……♡」

「来てくれて、うれしい♡」

そんなことを言う人だったんだ。

みおは胸がいっぱいになって、彼のシャツをつかんだ。

「部長。昨日、私、言いましたよね。不公平だって」

「言ったな」

「今日は私がします」

氷室の眉が上がった。

「したことは」

「……ないです。上手じゃないと思います」

「上手じゃなくていい。お前がしたいなら♡」

「したい、です」

氷室は運転席をいちばん後ろまで下げて、背もたれを少し倒した。

みおは助手席から身を乗り出す。あいだのひじ掛けが邪魔で、届かない。みおは靴を脱いで、助手席に膝立ちになった。そこから運転席へ体を倒す。

ベルトを外す。手がもたついて、金具がちゃかちゃ鳴った。

ファスナーを下ろすと、下着の布が大きく押し上げられていた。

そっと布を下げる。

ぶるん、と跳ねるように出てきた。

（お、おっきい……っ）

思っていたより、ずっと太い。先は赤くふくらんで、透明な汁がにじんでいる。

金曜も昨日も、これをずっと我慢していたのだ。

「怖いかな」

「……びっくり、してます。部長の、ちんぽ……こんなに、おっきいんですね」

「そうだ♡ みおのせいで、ずっとこうなってる♡」

握ってみた。熱くて、硬くて、手の中でどくんと脈を打つ。

指が回りきらなかった。

「どう、すれば……」

「先をなめて。あめみたいに♡」

言われたとおりに舌を出した。

ぺろ、と亀頭をなめる。しょっぱい。男の人の匂いがする。

「ん……♡」

「そう。上手♡ くびれのところも♡」

ぺろぺろぺろぺろちろちろ♡

カリの段になったところを舌先でなぞると、頭の上で氷室の息がつまった。

（……あ。いま、感じた？）

うれしくなって、同じところをしつこくなめた。

ちんぽがぴくんと跳ねる。先から汁がとろりとあふれてくる。それもなめ取った。

「くわえてみて♡ 歯は当てないように♡」

「は、い……あむ……っ♡」

口を大きく開けて、先をふくんだ。

あごが外れそうだった。亀頭だけで口の中がいっぱいになる。

「んむ……っ♡ ん、んう……♡」

「むりに奥まで入れなくていい。手でしごいて♡」

根元を握って、上下に動かす。口は先を吸う。

じゅぽじゅぽじゅぽじゅぽ♡

よだれがあふれて、さおを伝って落ちた。

氷室の手がみおの髪をなでた。

耳に髪をかけて、頬を指の背でなぞる。

「みおの口の中、あったかい♡ 気持ちいい♡」

「んんっ♡」

褒められるたびに、まんこがきゅんとする。

触られてもいないのに、ショーツがぬれていくのが分かった。

腰が勝手にゆれていた。それを、上から見られていた。

「お前も、欲しくなってるな♡」

氷室の左手がみおの背中をおりていった。

スカートをめくり、ストッキングのゴムをくぐって、お尻のほうからショーツの中に入ってくる。

くちゅり。

「んんーっ♡♡」

「びしょびしょだ。俺のちんぽをなめてるだけで、こんなに♡」

「んむっ、ぷあっ♡　だ、だって……っ♡」

「口、止めない♡」

またくわえた。

後ろから指が入ってくる。ぬぷぬぷと奥まで届いて、中をこする。

じゅぽじゅぽじゅぽ♡　くちゅくちゅくちゅ♡

口と、下と、両方から音がする。

気持ちよくて、頭がぼうっとして、しゃぶるのが雑になった。それでも、氷室は怒らなかった。

「上手、上手♡　みお、そのまま♡」

「んぶっ♡ んっ、んんっ、んううっ♡♡」

指が速くなった。

お腹の裏をとんとん、とんとん、とたたかれる。

みおは鼻で息をしながら必死に吸いついた。舌をカリに巻きつける。

「……っ、みお。もう出る、口を離せ」

初めて、声がかすれていた。

みおは首を横に振った。離さなかった。

「ばか、お前……っ、く……ッ♡」

びゅるるるっ♡

口の中でちんぽが跳ねた。

熱い精液が喉の奥に当たる。どぷ、どぷ、と止まらない。

量が多くて、口の端からあふれた。苦い。
どろどろしている。

その瞬間、中の指がぐっと奥を押した。

「んんんーっ♡♡♡」

みおもイった。

ちんぽをくわえたまま、腰が、がくがく震える。指をぎゅうぎゅう締めつけた。

ごくん。

喉が勝手に動いて、飲みこんでいた。

「……はぁっ、は……っ♡」

口を離すと、白い糸が引いた。

氷室は座席にもたれて、肩で息をしている。前髪が乱れて、目の周りが赤い。

会社でこの顔を知っているのは、きっとみおだけだ。

「……飲んだのか」

「飲みました」

「ばか。離せと言っただろう」

「離せ、とは言われました。飲むな、とは言われてません」

氷室は何か言いかけて、やめた。

指がぬるりと抜けて、みおの腰がもう一度跳ねた。

氷室はダッシュボードからティッシュを出して、みおの口の周りをふく。手つきがやけにていねいだった。

「あの」

「何だ」

「ありがとうございました」

また言ってしまった。

みおは自分の口を押さえた。お礼を言う癖が、こんなときにまで出る。

氷室が吹き出した。

声を出して笑っていた。

肩を揺らして、目じりにしわを寄せて。二年隣にいて、初めて見る顔だった。

「礼を言うのは俺のほうだ」

「わ、笑わないでください」

「むりだ。お前、かわいすぎる♡」

氷室はファスナーを上げて、背もたれを起こした。みおはふらつく足で靴をはき直し

た。

氷室はみおをアパートまで送ってくれた。

信号で止まるたびに、彼の左手がみおの手を握る。青になると離れる。

「白峰」

大通りを曲がったところで氷室が言った。
仕事の声だった。

みおは反射で背すじを伸ばした。

「土曜、大阪。取引先の新工場の完成式典だ。同行を命じる」

「はい。資料はそろえてあります」

「一泊になる。夜に会長との会食がある」

「はい」

「部屋は別々に取ってある。どっちで寝るかまでは、命令しない」

返事ができないうちに、アパートの前に着いた。

車を降りて、角を曲がるテールランプを見送った。

部屋に入って、洗面所の鏡の前に立つ。唇が少しはれていた。

口の中に、まだあの人の味が残っている。

歯ブラシを持ったまま、みおはしばらく動けなかった。

結局、みがかずにコップへ戻した。

奥付

作品名 冷徹上司は残業の秘書をクンニと甘い声で毎晩イかせて離さない

サークル いい子指導室♡

発行日 2026・10・2

レーティング R18